

優秀賞

「ずっと変わらない」

登米市立東和中学校 二年
及川 優奈

私の曾祖母は認知症だ。言つたばつかりのことをすぐ忘れてしまつたり、物を失くしてしまつたりしてしまう。小さい頃から私の事を大事にしてくれている曾祖母。大好きな曾祖母に忘れられてしまう日が来るのではないかと、寂しい気持ちになつた。でも、曾祖母は私が家に帰ると優しい顔で、

ていた。まだ信じていないようだった。その日から曾祖母は別人のように変わってしまった。夜にリビングにある食べ物を食べたり、外を徘徊しようとしていたりしていた。祖母へのあたりも強くなつていった。

その何週間かした後、私にとつて一番嫌な事が起きた。私が「おはよう」と声をかけると曾祖母は、「誰だつたかな……。」

と私の事を忘れてしまつていた。
「優奈だよ。」
と声をかけると、

卷之二

「あー、優奈か。おはよう。」

と納得して

そう言うと曾祖母は、変顔をして部屋に戻っていく。そんな曾祖母が大好きだった。

ある日のこと。私が二階の部屋で勉強をしていると、一階から大きな声が聞こえてきた。びっくりした私は、一階に降りていくと祖母と曾祖母がいた。大きな声の正体は曾祖母だった。祖母に話を聞くと、曾祖母は祖母が財布を盗んだと言つた。うらしい。祖母が盗むはずがないと思った私は、財布を探す

「あつた!!

祖母が財布を見つけると、曾祖母は疑うような目で祖母を見

つてくるぬり絵や点つなぎ、計算のプリントをよく私に見せに来る。ぬり絵は、本物そっくりにぬってあつたり、少し色が不思議だつたりした。点つなぎや計算は頑張つて解いていた。そのことをほめると曾祖母は、

「ありがとうね。」

と優しい顔で笑う。そのことが頭にうかんだ。また曾祖母の笑った顔が見たくて、自分なりに考えて、優しい接し方をするように心がけた。曾祖母の笑顔が増えた気がして、心がぽかぽかした。

私の曾祖母は認知症だ。言つたばっかりのことすぐ忘れてしまつたり、物を失くしてしまつたりしてしまう。小さい頃から私の事を大事にしてくれている曾祖母。大好きな曾祖母に忘れられてしまう日が来たとしても、曾祖母は私の曾祖母ということ、私は曾祖母のひ孫ということに変わりはない。そんな曾祖母がやつぱり大好きだ。